学位論文要旨

「文学体験」論を軸にした文学教育の理論と実践の開発

―西郷文芸学「相変移」論の検討を中心に―

広島大学大学院　教育学研究科　博士課程後期

教育学習科学専攻

D181123

髙橋茉由

Ⅰ　研究の目的

文学にどのような教育価値を見出し，どのように教育活動を行っていくのか。文学教育は常にこのことについて考えてきた。この考えは，文学作品をどのように考えるか，そして読者は文学作品をどのように読んでいるか，という問いとも関係しており，これらの問いについて考えてきたともいえる。

西郷文芸学では，文学を「文芸」と呼ぶ。このように表現するのは，文学を芸術作品として扱うことを強く表すためである。西郷文芸学は一貫して，美を捉える主体（自己）について考えていた。西郷文芸学では，「美」は，認識する主体によって，「美」と感じるものだと考える。客観的に「美」が存在するのではなく，認識する主体が「美」だと感じるから「美」が存在するのである。文学作品は〈認識主体〉が「美」として感じることが大前提であり，そのような経験（体験）が読むことなのだと西郷文芸学では考えるのである。西郷は，文学作品を「芸術作品」として扱うこと（認識主体が「美」と感じる存在としてという意味），その存在から教育的効果や意義を考えていくこと，そこに文学教育の価値があると考えたのである。以上の考えを基盤として西郷文芸学の各論が構築されてきた。

西郷文芸学が展開した「文学体験」論（共体験論）は，文学教育に大きな影響を与えてきた。熊谷孝が提唱した準体験論において読者の主体性が重要視され，さらに西郷文芸学による共体験論によって，読者の「文学体験」と作品の構造との関係が明らかになった。西郷は，視点の構造によって，読者の読みの体験が方向づけられると説明した。読者は，視点の構造（「内の目」）によって，視点人物に「同化」し，それと同時に，視点の構造（「外の目」）によって，第三者として視点人物を批判的に眺める「異化」の体験を行う。この同化体験と異化体験が同時に起きる体験のことを，西郷は「共体験」と呼んだのである。

以上のように，西郷は，読者が文学の作品世界の構造と関わって作品世界を体験していく中で，文学の世界を捉え，人とは何か，自己とは何かと考えていくことが，文学の読みであると考えた。

しかし，上記の立場に立って授業をする場合，以下の点において課題がある。

〇学習者の個々の読みをどのように扱うかに関する方法論がない。

学習者である読者は，文学作品を体験し，様々な読みを持つ。それらの個人の読みを教師が一つの方向に導こうとするならば，それは，教師が考える「正解」へと辿り着かせようとする授業になる。一方，様々な読みをそのままにしていれば，どんな読みでも良いという授業になり，学習者の読みは深化しない。この両者の関係をどのように考え，授業を行うべきか。学習者がどのような読みの過程を営んでいるかを究明する必要がある。

〇体験的な授業をどのようにデザインすればよいかわからない。

西郷文芸学では「文芸研方式」という授業の過程における理論がある。しかし，この理論は，文学作品を詳細に読む段階において，文学用語を用いて作品構造を分析的に読むことで，作品世界を想像しようとするものである。したがって，授業では教師の指導性が強くなり，読者が体験的に読む授業ではない。この点について，西郷文芸学の理論を基に行う西郷の授業に対しての批判がある。

学習者が体験的に文学を読む場合，その読みを授業としてどのようにデザインしていくのか，この疑問を解決する必要がある。国語教育において，様々な「文学体験」論が提出されているが，どのような授業を行うかは様々に議論されており，どのような授業が体験的な授業になるのかが分からない状況で

ある。

このような状況の中，西郷文芸学では，共体験論の後に「相変移」論が提出された。共体験論に対する批判を乗り越えるかたちで提出されたものであると考えられるが，「相変移」論の検討が十分になされていないため，どのような成果や課題があるのかがわからない。

本研究は国語教育における文学教育のこのような状況を踏まえて，次のような研究の目的を掲げ，「文学体験」を軸にした文学教育の理論と実践の開発を進めるものであり，「文学体験」を軸にした文学の授業が効果的な教育方法として国語教育に資することを目的とする。

１．読者の読みの過程と作品との関係を明らかにし，学習者の個々の読みをどのように扱うかに対する知見を得ること。

特に，依然十分に究明されたと言い難い西郷文芸学「相変移」論の内実を考究し，読者の読みの過程と作品との関係を明らかにすることを中心とする。その上で，学習者の個々の読みをどのように扱うかについて論じる。

２．学習者が体験的に文学を読む授業をデザインするための実践理論を構築すること。

Ⅱ　研究の方法

研究の目的を達成するために，本研究では以下の方法を用いる。

「１．読者の読みの過程と作品との関係を明らかにし，学習者の個々の読みをどのように扱うかに対する知見を得ること」に対する研究方法

①　国語教育における文学体験論を概観し，整理する。（第１章）

②　西郷文芸学「相変移」論の内実を明らかにし，読者の読みの過程と作品との関係を究明する。（第２章）

③　①②を踏まえて，西郷文芸学「相変移」論の成果と課題を示した上で，課題を乗り越えるために他の理論を援用する（第３章第１，２節）。

「２．学習者が体験的に文学を読む授業をデザインするための実践理論を構築すること」に対する研究方法

④　③を踏まえて実践理論を構築する。（第３章第３節）

⑤　④にて構築した実践理論を用いて実践を行い検討する。（第４章）

⑥　⑤の実践の課題を乗り越えるかたちで実践を行い検討する。（第５章）

⑦　⑤⑥の実践を踏まえて，実践理論を再構築する。（第６章第１節）

⑧　実践理論をもとにした教育現場での実践可能な場面を考察する。（第６章第２節）

⑨　これまでの研究の成果と課題，展望をまとめる。（終章）

Ⅲ　本研究の成果

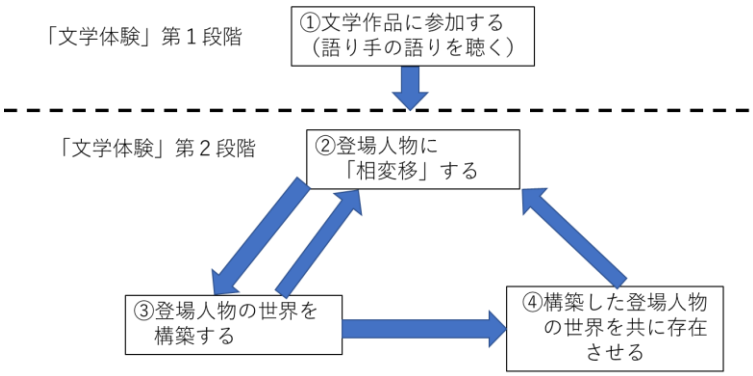
本研究の目的の１点目について，本研究は，西郷文芸学「相変移」論の内実を究明することを通して，読者の読みの過程と作品との関係を次のように明らかにした。作家が作品創造の際に，作品内の

様々な人物になって（「相変移」して）作品をつくることは「視点」を設置することであると考えることによって，作品内の様々な人物は，作家の体験を基盤とした同一性（西郷の言葉であれば作家の観点）をもっている形象であると同時に，作品の人物の固有の存在として差異性をもった形象として設置されている。このような過程を経て作品がつくられているから，読者は作品に配置されてある人物になって視点を重ねることが可能であると同時に，それらの人物が作家の体験を基盤とした共通性によって繋がっている形象であることから，読者は様々な人物に相互に「相変移」していき，それらを重ね合わせる文学体験が営まれる。

また，学習者の個々の読みをどのように扱うかについては，２点目の体験的に文学を読む授業をデザインするための実践理論を構築することと共に，理論を構築することができた。

西郷竹彦と田中実の読みを比較することを通して，西郷文芸学「相変移」論と田中実の「第三項」論における読みの扱い方について究明することで，体験的に文学を読む授業及び学習者の個々の読みをどのように扱うかに対する知見を得た。読者は，文学作品内の人物（語り手や作者，視点人物等）に「相変移」して（なって），なった人物から見ている世界を想像する読みを行っていることが明らかになった。また，田中実の「第三項」論は，認識主体の認識行為自体をどのように対象化するか，その過程を明らかにしようとした理論であるため，文学作品内の人物の認識行為を対象化するだけでなく，読者である学習者の認識行為を対象化できる考えになっていることも明らかになった。この考えを用いることで，授業において，学習者の読み（学習者の認識）を対象化し互いの読みが共にどのように存在しているのかについて考えることができるため，学習者の個々の読みをどのように扱うかという問題について答えられる理論となっている。これらの考えと，山元隆春，難波博孝の作品に「参加」する考えを加えて，仮説の実践理論を構築した。

その上で，２つの実践を行い，実践理論を再構築した（図１）。 学習者の個々の読みを，「相変移」を促進するものとして扱うことで，「文学体験」のサイクルを活性化できると考えた。また，学習者の個々の読み自体を学習材とすることで，文学を読む価値と学習者の個々の読みとの関係を示すことができた。実践を行い実践理論を修正することで，教育者側の手立てや学習者が「文学体験」を営むために設定するとよい言語活動を表１のように具体的に提示することができたことで，実践しやすい理論になったと考える。



【図１】
新しい「文学体験」論のサイクル

再構築した実践理論は，文学の読みだけでなく，「人との関わり」についても学ぶことできることから，生きていく上で人間とは何かについても学ぶ理論であるといえる。その点，学校現場における日々の指導との関連も深い理論である。本研究では，十分に示すことができなかったが，教育者が日々している学習者への働きかけと，「文学体験」との関連を示すことによって，国語科の授業以外にも広がる理論であることを示した。特別の教科道徳の授業にも用いることができる理論でもある。このように，文学の読み

という表層の理論としてではなく，人間の在り方について学ぶことができる理論であるという可能性を示すことができた。

【表１】
新しい「文学体験」論の授業デザイン表

	「文学体験」の過程	教師の手立て	言語活動
①	文学作品に参加する（語り手の語りを聴く）	作品に親しみをもたせること，文学作品の世界を想像しやすいものにすること	・詩の創作を何度もする。 ・同じ作者の他の作品に慣れ親しむ（作品を教室に置く，読み聞かせをする）。 ・作品に描かれる気象や物等について親しみをもつようにする。（「水仙月の四日」の場合：岩手県の台風や雪の性質について学ぶ。雪を扱った作品を読む）。 ・これまで読んだ教材をもとに，授業で行う言語活動をやってみるようにする（「白いぼうし」の場合：「モチモチの木」や「三年峠」のまんがをかく）。
②	登場人物に「相変移」する	「相変移」しやすい登場人物を選択して「相変移」するようにすること，他の学習者がつくった作品を読んだり話し合ったりすること	・詩を創作する時に，なりたい登場人物もしくは登場事物を選択する。 ・朗読劇の作成時に，他の学習者の詩を読む。 ・まんがを創作する時，なりたい登場人物を選ぶ。 ・まんが集の作成にあたり，他の学習者のまんがを読む。 ・話し合う。
③	登場人物の世界を構築する	作品を創作する言語活動を設定すること（語り手になる）	・詩を創作する。 ・まんがを創作する。
④	構築した登場人物の世界を共に存在させる	創った作品を集約すること，話し合いによって納得解を見つけること	・つくった詩を集めて朗読劇をつくる。 ・話し合う。 ・つくったまんがを集めてまんが集をつくる。

Ⅳ　本研究の課題と今後の展望

本研究の実践で扱った文学作品は，学習者が比較的「相変移」しやすい登場人物が登場していた。「相変移」できない学習者がいたとしても，全ての学習者が「相変移」できないということはなかった。したがって，作品を読み合うことや，話し合うという手だてが有効に働いた。しかし，全ての学習者が「相変移」できない登場人物がいる作品を学ぶときは，どのような学習活動を設定すればよいのだろうか。

本研究の実践後に，「気のいい火山弾（宮沢賢治）」の実践を行った。「気のいい火山弾」に出てくる「ベゴ石」という登場人物は，学習者が「相変移」できない登場人物であった。なぜなら，学習者がこれまで経験したことのない価値観で生きている登場人物だからである。「相変移」するための情報（生活経験などの同一性）が少ないため，「ベゴ石」の世界を構築することができないのである。

今後は，このような教材の場合，どのような学習活動が考えられるのかについて研究を進めていく必要がある。

この問題は，文学の中の話だけでなく，私たち人間が生きていく上で向き合う大きな問題でもある。自己とは異なる他の人と関わりながら生きていく上で，全く気持ちが理解できない人と関わっていく時がある。例えば，他の国で育った人と関わる時，信じる宗教が異なる人と意見を擦り合わせる時。私たちは，理解できない相手を拒むことによって，衝突し合い，戦争などの悲しい出来事が生みだしてしまう。

「相変移」できない人物に「相変移」する方法を明らかにすることは，分かり合えないと感じる他者と共に生きる希望となると考える。「気のいい火山弾」の授業を通して，ベゴ石に「相変移」するのではなく，ベゴ石と他の登場人物との関係を捉え，それらを重ね合わせることで，ベゴ石の背景や状況を想像できるのではないかという考えに至った。今後は，この考えを手がかりにして研究を進めていきたい。

主要引用参考文献

足立悦男（1999）『西郷竹彦文芸・教育全集別巻Ⅱ巻　西郷文芸学の研究』恒文社

熊谷孝（1963）『芸術とことば』牧書店

西郷竹彦（1998）『西郷竹彦文芸・教育全集　第 14 巻』恒文社

西郷竹彦（2008）「文芸（虚構）の世界～西郷文芸学の新展開　その１～」文芸研編『文芸教育』87　新読書社

西郷竹彦（2009）「変幻自在な相変移（変身）のメカニズム　その複雑・微妙な様相」文芸研編『文芸教育』89 号，新読書社，6-29

田中実（1996）「多層的意識構造のなかの〈劇作者〉」『小説の力―新しい作品論のために』大修館書店，55-88

田中実（2018）「〈近代小説〉の神髄は不条理，概念としての〈第三項〉がこれを拓く―鴎外初期三部作を例にして―，日本文学協会編集，『日本文学』第 67 巻　第８号，ひつじ書房, 2-17

難波博孝（2007）「「文学体験と対話による国語科授業」のための理論」難波博孝ら『ＰＩＳＡ型読解力にも対応できる　文学体験と対話による国語科授業づくり』明治図書，pp. 7-47

山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシー実践に向けて―』溪水社